

くまのパディントンが、「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」主演男優賞を受賞しました！
パディントンの受賞スピーチ全文



中学生が作ってくれたオスカー像

親愛なる日本の読者のみなさん、わけても箕面市の小中学生のみなさん、

ぼくの本を読んでくださってありがとうございます。3か月ほど前、ぼくの本を日本語に訳してくれた松岡享子さんから連絡があり、ぼくが「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」の主演男優賞に選ばれたことを知りました。ほんとのことをいって、ぼくは、ぼくの本が日本で読まれていることもよく知りませんでした。だから、これにはほんとうにびっくりしました。

アカデミーショーというのも、シュエンダンユウショーというのもよくわからなかったので、ぼくはブラウンさんのうちの人たちに訊きました。ブラウンさんは、アカデミー賞というのは、たいへん立派な賞で、シュエンダンユウショーというのは、お芝居や映画で、いちばん大事な役を見事に演じた男の俳優に与えられる、とても名誉のある賞だと教えてくれました。ジョナサンは、「へえっ、すごーい！」と叫び、ジュディも、「よかったわね、パディントン。」と、喜んでくれました。ブラウンさんの奥さんは、「さっそくルーシーおばさんにもお知らせしなくちゃね。」といい、バードさんは、「では、きょうはお祝いに糖蜜のプディングをつくらないといけませんねえ。」といって、さっそくお台所に向かいました。ブラウンさんたちが、大騒ぎをするのを見て、これがとても名誉のある、たいへんなことだとわかって、ぼくは、胸がドキドキしました。

「だが、主演男優賞といっても、パディントンは、舞台に立ったわけでもないのにねえ。」と、ブラウンさんが疑わしそうにいました。「たしかにサー・シーリー・ブルームといっしょにお芝居に出たことは出たが、あのときはプロンプターとして、サー・シーリーに台詞を教えただけだし、ハロルド・プライス青年の素人芝居に出たときは、雷の音を担当する音響係だったんだからねえ。そりゃ『オッズ・ボドキンズ』とかなんとか、二言三言わけのわからん台詞をいいはしたけれど、あれで主演といえるのかねえ。」

それを聞いて、ぼくもちょっと心配になってきました。そうしたら、ブラウンさんの奥さんが大急ぎでいきました。「まあ、ヘンリー、それは違いますわ。パディントンが主役を演じたのは、本なんですもの。13冊もあるパディントンの本じゃ、どの章もパディントンが立派に主役をつとめているじゃありませんか。」

そうだ、そうだ、という賛成のことばが家族一同からもれたのを聞いて、ブラウンさんも納得したようでした。

でも、ぼくは、外国といえば、生まれてからイギリスへ密航するまでルーシーおばさんと住んでいたペルーと、ブラウンさんたちと旅行をしたフランス以外は知りません。日本というのも、箕面というのも初めて聞いたのです。わからないことがあるときは、グルーバーさんに聞くに限ります。グルーバーさんは、なんでもよく知っていて、いつも親切に教えてくれるし、お店には、なにか知りたいときに参考になる、古い本がたくさんあるからです。ちょうどお十一時に近かったので、ぼくは、さっそくグルーバーさんのところへ行くことにしました。

ぼくが玄関から勢いよくとびだしたら、門のまえで、お隣のカーリーさんにばったり出会いました。「そんなに急いでどこへ行くんだ、クマ公？」と、カーリーさんはいいました。ぼくは、カーリーさんが苦手です。カーリーさんと関わると、いつもなにか困ったことが起きるからです。

「ぼく、アカデミー主演男優賞をもらったんです。」と、ぼくはできるだけそっけなくいいました。

「主演男優賞？」と、カーリーさんは聞き返しました。「おまえ、いつ芝居や映画に出たんだ？」

「お芝居や映画じゃありません。これは本なんです。」と、ぼくはいいました。

「本？ おまえのことが出ている例の『くまのパディントン』のことか？」

「ええ、そうです、カーリーさん。それが、日本語に翻訳されて、それを読んだ人たちの投票で、ぼくが選ばれたんです。」

「ふん、おまえが主演男優賞なら、わしはさしずめ助演男優賞だ。わしには賞はくれんのか？」と、カーリーさんは、不満そうにいいました。

「わかりません。これは、ぜんぶ箕面で決めたことですから。」と、ぼくはいいました。

「みのお？ ミノー？」カーリーさんは、そういうと、急になにかを思い出したのか不機嫌になって、「わしが税金を未納しとるなんて、だれがいった。納入がちょっと遅れとるだけじゃ。ふん、ばかばかしい！ 主演男優賞だなんて、つまらん話だ。」と、ぶつぶついいながら行ってしまいました。

ぼくは、やれやれとほっとして、いつものお店で、いつもの菓子パンを買って、グルーバーさんのお店へ急ぎました。ぼくが、賞のことを書いた手紙を見せると、グルーバーさんは、それ

を読んで、「なんとなんと、すばらしい話じゃないか、ブラウンの旦那。世界広しといえども、アカデミー主演男優賞をもらったくまは、ほかにいないと思うよ。いやあ、おめでとう！」といて、大喜びしてくれました。

ぼくが、日本のことも、箕面のこと知らないというと、グルーバーさんは、店の奥から大きな地図の本をもってきて、見せてくれました。それを見ると、日本は、イギリスとはずっと離れた反対側にあつて、でも、イギリスと同じように島国だということがわかりました。それは、大きな地図帳でしたが、世界地図だったので、いくら探しても、箕面というところは見つかりませんでした。

グルーバーさんは、地図のほかにも、日本のことを書いた本や、きれいな写真ののっている旅行案内の本を何冊か出してきてくれました。「いや、わしも、日本のことにはくわしくないんだがね。とても、きれいな国で、人々が、礼儀正しく、勤勉なことで有名だよ。ブラウンの旦那のことを知っている子どもがいるくらいだから、読書する人の数も多いんだろうね。わしが興味をもったのは、あっちこっちに温泉とって、地面から熱いお湯のわくところがあるってことだがね。」

「温泉って、お風呂みたいなもの？」と、ぼくは訊きました。

「そう、ものすごく大きなお風呂のようなものらしいね。ほら、これを見てごらん。」と、グルーバーさんは、両側に山のそびえる谷間に池のようなものがあつて、湯気がでていて、何人かの人がのんびりお湯につかっている写真を見せてくれました。

ぼくは、お風呂はあまり好きではありません。ブラウンさんのうちへきて、初めてお風呂にはいったとき、もうちょっとで溺れそうになったことを思い出しました。でも、温泉のほうがお風呂よりずっと気持ちよさそうだし、おもしろそうだと思いました。

グルーバーさんのところで見たとのなかの写真は、どれもとてもきれいでした。段々になった田んぼや、うすいピンクのさくらの花でいっぱい川べりや、イギリスのとは全然違うお城や、大勢の人がおそろいの着物をきて踊っているところなどはや、とてもおもしろかったし、そうかと思うと、ロンドンとおんなじような、いや、もっと高い建物がびっしりたっている東京という街の写真もありました。見ているうちに、ぼくは、日本に行ってみたいなあと思いはじめました。なにしろぼくは、もともと好奇心が旺盛で、知らない土地へ行って、知らない人と会って、友

だちになるのが大好きだからです。

その晩、うちに帰って、グルーバーさんのところで、日本の写真をたくさん見たけれど、箕面というのはどこにあるかわからなかったという、ジョナサンとジュディが、「じゃ、ネットで見て見よう。」といって、インターネットでしらべてくれました。そうしたら、いろんなことがわかりました。箕面は、日本で二番目に大きい大阪という大都市の近くで、今ごろは、紅葉がきれいなんだって。パソコンの画面には、赤や、黄色の紅葉のものすごくきれいな景色が出ていました。それを見ていたら、ぼくは、ますます日本に行ってみたくくなりました。

そのとき、いろんな説明をていねいに読んでいたジュディが、突然大きな声をあげました。「ねえ、ねえ、パディントン、聞いて！ あなた、ぜったいに箕面に行くべきよ。だって、ほら、箕面の特産物は、ゆずという柑橘類で、これでマーマレードをつくる、って書いてあるわよ。」

ぼくは、旅行は大好きだけれど、ひとつ心配なのは、旅先でマーマレードが切れたらどうしようかということです。だって、マーマレードサンドイッチなしには、生きていけないからです。日本は、イギリスからうんと遠いので、日本には、マーマレードがないかもしれない、そうだとしたら、旅行用手荷持のなかに、マーマレードをたくさんつめていかなければならない。もしかしたら、ペルーから密航したときよりもっとたくさんの瓶がいるかもしれない。ぼくのスーツケースひとつでは足りないかもしれない。それでは困るなあ、と思っていたのです。ぼくは、ゆずというのは知りませんが、マーマレードができるのなら、きっとオレンジとおんなじくらいおいしいに違いありません。これで、一安心。ますます日本へ、そして、箕面へ行きたくなりました。

それに、松岡さんからのお手紙によれば、日本では、2018年から、全国で「くまのパディントン展」というぼくの展覧会が開かれるとのこと。最初は京都で、それから福岡、東京、郡山、浜松・・・と、日本全国をめぐるということです。箕面にも来ればいいですね。

それにしても、日本で、ぼくの本が、大勢の人に読まれていると知って、とても驚き、うれしく思います。とくに、箕面の小中学生のみなさんが、ぼくを主演男優賞に選んでくださったことは、ほんとうにうれしいです。おかげで、ぼくの心に、新しい国や町に対する、新しい興味が生まれました。ぼくのことですから、日本に行けば、これまで味わったことのないいろいろな経験をすることでしょう。例によって、奇想天外のへまもやることでしょう。どんなことになるか

たのしみです。

ひとつ、みなさんに提案したいことがあります。ぼくが、もし、箕面に行ったら、どんなことが起こるか、想像して、お話を書いてみてくださいませんか。ぼくの本をたのしんで読んでくださったみなさんなら、きっととてもおもしろいお話が書けるはずだと思います。書けたら、どうぞ図書館に送ってください。もとのお話を書いたマイケル・ボンドさんもびっくりするくらい、おもしろいお話ができることを期待しています。なにしろ、バードさんがいうように、クマであることのいちばんいいところは、クマにはいろんなことが起こることですし、それにパディントンクマは、どんなことが起きても、コマらないようにできているんですから。

ほんとうに、ぼくにこんな名誉ある賞をくださってありがとうございます。おかげで、ぼくの世界がぐんと広がりました。いつかきっと日本へ行きたいと思います。グルーバーさんが、『日本語早わかり』という本を貸してくれたので、ぼくは、もう今から、日本語の勉強をはじめます。初めに覚えたのは、「アリガトー」ということばです。これは、どの国に行っても、たいへん役に立つことばですね。でも、今、ここで使うのに、いちばん適したことばだと思います。はじめに申し上げたことを、もういちどくりかえして申し上げます。ぼくの本を読んでくださって「アリガトー！」、ぼくを主演男優賞に選んでくださって「アリガトー！」。いつかみなさんに、日本で、箕面でお会いできるのをたのしみにしています。

心よりの感謝をこめて、

love from
paddington



2016年11月19日

於「箕面・世界子どもの本アカデミー賞」授賞式